

花は人を呼ぶって
ほんとはだな

さとう うきち
佐藤 右吉

震災後にはじめて大熊町に戻った住民

昭和14年(1939)、大熊町生まれ。

終戦後、親父が大熊町の大川原地区に住み始めて、俺は生まれてからずっとここに住んでんだ。主な仕事は林業、それだけでは食っていけないから秋になると出稼ぎに行ってた。20代のころ、原子力発電所ができて東京電力の関連会社に勤めて定年。2011年の3月11日はダムの管理の仕事をしていて、電気もつながらないから何もわがんねがった、そのうち少しずつ情報が入ってきて、「ひどいぞ、津波がきて海辺の部落、流されてなんもねえぞ」って聞かされても、すぐには信じらんがった。それからは、船引、新瀧、柏崎と避難しつつ、そして会津若松の仮設住宅へ。そこに8年いる間、町の見回り頼まれて、自宅の片付けもしながら会津から150キロかけて通う途中に「ざる菊」が咲いているのを見つけた。心がぼっと明るくなるようだった。苗をゆずってもらって、自分の家の庭で育て始めたんだ。「花が咲いたら、だれか見に来てくれっかなあ」っていう淡い期待も込めて。そしたら、町に帰宅する人が寄ってくれるようになった。「花は人を呼ぶってほんとはだな」今年オリンピックが開かれる年だから、五色の「ざる菊」で飾ってみようか。一人でも多くの町民が大熊に戻って町が少しでも以前の姿に近づくように。



訪れる人の心を癒やす色とりどりのざる菊